学　会　記　事

第260回新潟外科集談会

日　時　平成17年5月7日（土）
午後1時30分～3時37分
会　場　新潟大学医学部　有壬記念館

一　般　演　題

1　右胃大網動脈を使用した冠状動脈バイパス術後の胃癌手術症例の検討

蛭川　浩史・多田　哲也・天白　典秀
山本　和男*・吉井　新平*・杉本　努*
葛　仁猛*・青木　賢治*・桑原　淳*
春谷　重孝*
立川綜合病院外科
同　心臓血管外科*

右胃大網動脈（RGEA）を冠状動脈バイパス術（CABG）のグラフトとして使用した症例における胃癌手術について検討．過去9年間にRGEAグラフトによるCABG術後胃癌症例は5例あり年齢は56歳から83歳，男女比は4：1．術式は幽門側胃切除術4例，幽門輪温存胃切除術1例で郭清度はD0が3例，D1が1例，D2が1例だった．組織学的病期はstage Ⅰ A，2例，stage Ⅰ B，2例，stage Ⅲ A，1例だった．4例が生存中だが1例は胃癌の再発により死亡した．

【まとめ】5例のRGEAによるCABG術後胃癌症例を経験した．No.6リンパ節郭清は転移が起こりうるので積極的に行うべきである．

2　フェンタニルパッチを用いた癌疼痛緩和治療法の評価

鈴木　聡・三科　武・二瓶　幸栄
中塚　英樹・渡邊　真実・渡邊　マヤ
松原　要一
鶴岡市立荘内病院外科

フェンタニルパッチ（以下，パッチ）を用いた癌疼痛管理の有効性を，04年4月までの症例（前期）と，それ以降（後期）とで比較検討した．前期22例．男女比11：11，平均年齢63.3歳．後期17例．男女比13：4，平均年齢69.5歳．死亡直前までパッチ使用可（F群）は前期8例（36.4％）に対し，後期は10例（58.8％）まで上昇．疼痛管理不十分な前期14例，後期7例は塩モヒ注に変更（M群）．パッチ中止理由は，前期がレスキューの使用過多が9例（40.9％），パッチに対する認識不足が5例，後期は7例全例がレスキューの使用過多で中止．前期M群はF群に比べ男性が多く，61.4歳と若い傾向．後期M群は全7例男性，68.9歳で若い傾向．骨転移7例中6例はM群．フェンタニルパッチを用いた癌疼痛緩和治療はパッチを適切に使用することで，癌終末期患者のQOLを重視した有効な治療法となりえる．

3　脾動脈瘤4例の検討

岡村　直孝・松岡　二郎・小海　秀央
清水　孝王・島影　尚弘・草間　昭夫
内田　克之・田島　健三
長岡赤十字病院外科

〔症例1〕65歳女性．左側腹痛を訴え平成12年10月初診．CTにて石灰化を伴った径10mm大の脾動脈瘤と診断され，経過観察とした．

〔症例2〕57歳女性．尿潜血のため経過観察中．平成14年7月，エコーにて径13mm大の石灰化脾動脈瘤を指摘され，経過観察とした．

〔症例3〕61歳女性．以前より無症状胆石あり．平成11年8月，尿潜血のため泌尿器科を受診したが異常なく，胆石があるため当科を紹介された．径8mm大の非石灰化脾動脈瘤も指摘されたが，ともに経過観察とした．H15年3月のCTで胆嚢